HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	拠点的な場所と＜あるじ＞の役割に関する研究 : 国内のゲストハウスを事例として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石川, 美澄
Citation	北海道大学. 博士(観光学) 甲第13981号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78338
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Misumi_Ishikawa_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：石川 美澄

審査委員	主査　教授	西山 徳明
	副査　教授	山村 高淑
	副査　教授	内田 純一（小樽商科大学）
	副査　特任教授	木村　宏

学位論文題名

拠点的な場所と＜あるじ＞の役割に関する研究

―国内のゲストハウスを事例として―

令和 2 年 1 月 27 日（608 教室、10:00 開始）に行われた石川美澄氏の博士論文口頭試問は 2 時間 30 分にわたって公開で行われた。本人から博士論文の内容について 45 分の発表があった後、主査・副査から、論文の内容、研究手法、論述の組み立て方などに関して質問がなされ、それに対して執筆者が応答する形で試問が進められた。

本論文は、人と人、人と社会の接点が生まれるような拠点となる場所（以下、拠点的な場所とする）の意義と、その場所を代表し日々その場所の適切な運営を行う者＜あるじ＞の役割を明らかにすることを目的としている。そのため近年国内で増加傾向にあるゲストハウスに着目し、宿を立ち上げ日々その場所を運営する個人を＜あるじ＞とし、＜あるじ＞らの開業動機やゲストハウス運営に対する姿勢、それを利用する人びとの意見等の実証分析を通してこの目的を果たしている。

具体的には、4 つの研究課題、すなわち①拠点的な場所が成立するための要件は何か、②ゲストハウスの特徴とは何か、③ゲストハウスの＜あるじ＞の役割とは何か、④ゲストハウスの宿泊者やゲストハウスに時々顔を出す近隣住民はゲストハウスという場所やその＜あるじ＞をどのように捉えているのか、を提示した上で、先行研究における拠点的な場所に関する論点の整理、開業理由や経年変化を明らかにするための 2012 年と 2017 年に実施した質問紙調査、＜あるじ＞に対するヒアリング調査、宿泊者と近隣住民に対するヒアリング調査ならびにゲストハウス内の共有スペースにおける参与観察等といった非常に丹念な調査に基づいて、これらの疑問を解明している。

分析を通して、①拠点的な場所が成立するための要件は「不動（immobile）性」「小規模性」「個人による場所の立ち上げと＜あるじ＞の存在」「旅行者を含む多様な人びとがアクセスできる環境」の 4 つであること、②ゲストハウスの特徴は、インバウンド急増や空き家問題等の

社会状況の変化により、従来の「相部屋」「素泊まり」「個人経営」の単純なイメージから「国内の宿泊環境に対する不満解消手法」「空き家等を利用した不動産マネジメント手法」「個人経営から法人経営の参入」などに変化しつつあり再定義が必要であること、③＜あるじ＞の役割は、意識として「健全な宿泊業経営を行うこと」は自覚されているが「旅行者や近隣住民を含む多様な人びとの交流拠点の運営を行うこと」については選択的であること、④宿泊者にとっては「安価な宿泊を提供する施設」と「多様な人々との交流が得られる場所」という 2 つの機能が、近隣住民にとっては近隣住民同士の新たな接点がつくられる場所としての機能が確認できた。これらの研究成果は、住民やコミュニティと観光客との橋渡しをする＜あるじ＞の役割が、まちづくりに大きな貢献を果たしていることを明らかにしており重要である。この他に、旅館業の衰退、ホテル業の緩やかな成長に対し、ゲストハウスが原動力となった簡易宿泊業の展開が、日本の観光目的地経営上重要な役割を果たしてきていることも明らかにしている。

これらの研究成果の説明に対し、試問では以下の質疑がなされた。まず、宿であるゲストハウスが新たなコミュニティスペースやまちづくりの拠点となる可能性に注目が集まる中で、いち早くその視点に気づき取り組んだ本研究の意義、および、本研究が観光研究におけるゲストハウスに関するパイオニア的研究であるとともに、沖縄、京都、札幌という先端的な地域を網羅し全国の動向を扱った総合的な研究である点、ゲストハウスの発展にとって重要となる期間に相当する 2012 年と 2017 年の 2 時点において定量的な実態調査を行っている点に大きな意義が見出されるとの評価があった。続いて、各章の考察の結論部分での総合化が不足しているとする論文全体に係る指摘や、＜あるじ＞の個人的な背景、コミュニティの再興等に果たす公共的役割、地縁に留まらない趣味縁等による拠点的な場所になる可能性、様々な関係者をつなぐ＜あるじ＞のブリッジング（橋渡し）の役割に関する考察等の不足について指摘があった。

これらに対し執筆者は始終適切かつ誠実さをもって対応し、一定の回答が得られたとともに、本博士論文の意義と成果、その限界と発展可能性についてもしっかりと認識していることが確認された。

以上の公開口頭試問終了後、4 人の主査・副査のみで審査が行われた。副査からは、口頭試問における執筆者の回答を含めることで、一貫性のある完成度の高い論文となっていること、さらに、本研究で提示した結果や結論は、都市計画やまちづくり、観光まちづくりの研究領域において重要な貢献を果たしており、石川氏の博士論文は、高い学術的価値と独創性を有すことが確認された。以上より、博士論文としての基準を充分に満たすものであり、本学博士学位を授与することが妥当であると、主査および副査の全員一致で判断した。